

第4章 まとめ

中通古墳群は、熊本県阿蘇市一の宮町中通に所在する。そこは阿蘇谷北東部の平地部で、阿蘇谷北縁を画する外輪山から大きく南へ突出した象ヶ鼻のすぐ南側にあたる。古墳群と象ヶ鼻のあいだには黒川が西流し、その左岸に北流してきた東岳川が合流するが、中通古墳群はそうした東岳川の左右両岸にまたがるように営まれている。古墳群にはかつて少なくとも14基の古墳が存在したが、今は10基がその墳丘を残している。東岳川の西側にある長目塚古墳および上鞍掛塚A古墳の2基が前方後円墳で、前者は墳長111.5m、後者は65.5mとされる〔乙益1962〕。これら以外は円墳である。しかし、円墳とはいっても勝負塚古墳は直径が推定58.7m、車塚A古墳は推定47mときわめて大きい。このように中通古墳群は、熊本県下でも有数の古墳群であり、1959年（昭和34）12月、熊本県史跡に指定された。

長目塚古墳は、こうした中通古墳群のほぼ中央に位置し、その地番は熊本県阿蘇市一の宮町中通1202-1である。主軸をほぼ東西にし、前方部を東に向ける。かつて、東岳川はそうした長目塚古墳の前方部前面をまわりこむようにして流れており、そのせいもあってしばしば洪水を起こした。それを改善する目的で、東岳川を直線的に付け替える工事が計画され、その流路が長目塚古墳の前方部を横切ることになった。その工事の事前調査として、1949・1950年（昭和24・25）に長目塚古墳の前方部を対象にした発掘調査が実施された。報告書は1962年に刊行されたが〔坂本1962〕、埴輪の実測図はほとんど提示されず、また前方部石室出土遺物についての記述内容にも不十分な点が若干みられた。そのため、墳長が100mを超すという熊本県下でも五指に入る前方後円墳であるにもかかわらず、長目塚古墳の築造時期の評価は一定しなかった。

そこで、本共同研究では、長目塚古墳出土遺物の再整理作業を実施することによって、少しでも当古墳の様相を明らかにすることを目指した。その成果は前章までの箇所ですべて詳述されているが、以下ではそれらの要点を整理し、第2部のまとめとしたい。

第1節 墳丘および前方部石室

墳丘 長目塚古墳は前方部を東に向ける前方後円墳で、1962報告〔坂本1962〕によれば、その規模は墳長現存111.5m、後円部径59.5m、高さ9.2m、前方部長現存52m、幅約30m、高さ約4m、クビレ部幅約17m、高さ1.8mである。墳丘にそったかたちの幅の狭い周溝および外堤が存在したと考えられている。段築の様相ははっきりしないが、1962報告をもとに考えると前方部は2段の可能性がある。他方、後円部は1994熊大報告〔岩崎・山下編1994〕では2段あるいは3段の可能性が示唆されたが、3段なのではなかろうか。葺石を有し、円筒埴輪と壺形埴輪が樹立されている。なお、前方部の多くは破壊され残存していない。

前方部石室 1949・50年調査において、前方部墳頂前端付近のほぼ中央で石室が検出された。主軸を東西（墳丘主軸に平行）にする石棺系石室である。大きさは長さ1.85m、幅85cm、高さ約95cmである。天井石は2枚である。小口壁の中位から下位には、東小口壁では1枚の、西小口壁では2枚の板石を立て、その上に板状安山岩を小口積みになっている。側壁は、南北いずれも床面からの板状安山岩の小口積みである。1962報告では南側壁の東側に空隙部が存在するとされたが、誤認であると思われる。床面は砂質土の上に粘質土を敷くことによって形成される。床面中軸線上の東側には板石による石枕が設置されている。石枕の存在と石棺系石室であることを合わせて考えると、被葬者は木棺に埋葬されたのではなく石室床面に直葬されたと考えられる。石室の壁面および床面には赤色顔料が塗布されている。おそらくベンガラであろう。なお、被葬者の上胸部付近で出土した玉類に付着した赤色顔料は水銀朱と鑑定された。

第2節 出土遺物

1 前方部石室出土遺物

種類と数 前方部石室で検出された遺物には次のものがある（括弧内は現存数）。

石室内では、銅鏡1（1）、武器〔鉄刀2（2）、鉄鏃束2（2）〕、刀子8（刀身部13）、玉類〔勾玉4（3）、管玉5（4）、ガラス丸玉43（30）、ガラス小玉267（157）、ガラス小玉破片11（3）、滑石製臼玉26（20）〕が、天井石上では鉄斧1（1）が出土した。また、石枕の上で頭蓋骨1が検出された。

各遺物の特徴 銅鏡は仿製内行花文鏡で、B1式に分類される。櫛歯文帯がきわめて不鮮明である。古墳時代前期前葉から中葉のものである。鉄刀は出土時よりも錆化がかなり進行している。出土した2点とも把間には二本芯並列コイル状二重構造糸巻きが残る。古墳時代中期中葉から後葉にかけての時期に位置付けられる。鉄鏃束2点のうち1点は短頸片刃鏃のみ、もう1点は長頸柳葉鏃のみからなる。長頸鏃出現期のTK216型式段階に位置付けられる。刀子は1962報告で示されたものよりも多くの点数が確認された。両関と片関がほぼ同数みられることからTK208型式段階を中心とする時期に位置付けられる。鉄斧は無肩の有袋鉄斧である。製作技法はBⅠ技法と考えられる。玉類のうちガラス丸玉10点ずつが左右の両手首付近で出土した。それらは手玉であると推定される。ほかの玉類はすべて上胸部付近の出土である。

被葬者は東枕、仰臥伸展葬の1体で、出土した人歯から推定年齢35歳くらいの女性と鑑定された。

2 墳丘出土遺物

須恵器・土師器 須恵器・土師器は前方部前端から北斜面にかけての位置で検出された。1962報告でいくつか実測図が提示されたが、とくに須恵器においてはその多くの存在を確認できない。須恵器には甕、無蓋高坏、脚付短頸壺、器台、壺、甕の破片がある。TK216型式段階のものである。陶器窯産の可能性はある。土師器はそのほとんどが高坏と坏で、わずかに壺ないし甕の破片がある。林田編年〔林田2002〕の3期にみられる様相に近く、TK216～TK208型式段階前後の時期に位置付けられる。

埴輪 埴輪には円筒埴輪と壺形埴輪の両者がある。円筒埴輪は大型と中型に分かれる。大型は口径が60cm近くもある口縁部から急激に直径を減じて底部にいたる器形をなし、2条突帯3段構成に復元される。口縁部段にも透かし孔が4方向に穿孔され、その形状には円形のほかに方形ないし逆三角形がある。中型は通有の円筒埴輪であるが、資料数がきわめて少ないためその全体形状は不明である。樹立数そのものがきわめて少なかったと推定される。壺形埴輪は単口縁と二重口縁に分かれる。いずれも口径30cm前後、器高40cm前後の大きさである。底部の器壁がきわめて厚く、また胴部の器壁厚も円筒埴輪と同程度であることから、完全に埴輪化した最終段階の壺形埴輪であるにとらえられる。1962報告において、頸部に突帯を有し、口縁部と肩部に円形透かし孔が穿たれる単口縁壺形埴輪（B類）の存在が指摘されたが、そうした復元は間違いであり、その種の壺形埴輪は存在しないことが明らかとなった。なお、円筒埴輪および壺形埴輪とも黒斑を有しているため野焼き焼成によるものだが、硬質な焼成状態である。時期は、前方後円墳集成編年〔広瀬1991〕6期から7期前半、須恵器編年ではTK73～TK216型式段階に位置付けられる。

第3節 古墳の評価

古墳の時期 前方部石室の時期は、副葬品のなかでもっとも詳細な編年がなされている鉄鏃をもとに

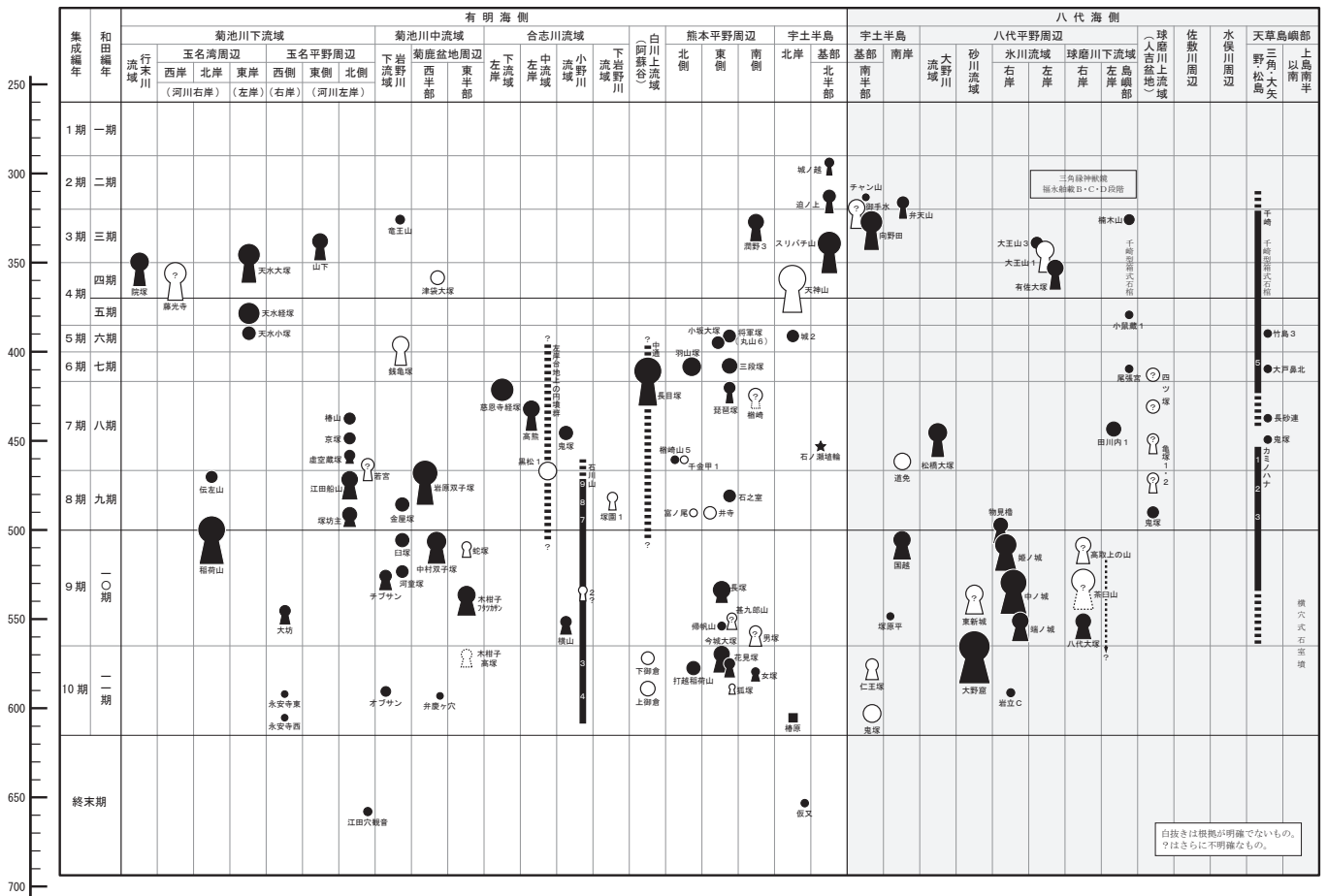


図 57 熊本県地域における首長墓系譜 (杉井 2010 を一部改変)

すると、TK216 型式段階と判断される。これは、前方部の墳丘上で出土した須恵器の時期と同じであり、また土師器の時期とも矛盾しない。

問題は古墳の築造時期である。これまでの、壺形埴輪の従来の年代観を根拠にして、集成編年 5 期とされることが多かった [高木 2008 など]。しかし、今回の再整理作業によって円筒埴輪および壺形埴輪を総合的に評価した結果、埴輪は集成編年 6 期から 7 期前半に位置付けられるとの結論に達した。これを須恵器編年に対応させれば、TK73 ～ TK216 型式段階に相当する。

これが正しいとすれば、上述した前方部石室の構築時期と古墳の築造時期とのあいだにはほとんど時期差を見積もらなくてもよい、あるいは両者はほぼ同時期であるとみなすことが可能となる。長目塚古墳の中心主体である後円部埋葬施設の様相がまったく不明であるから断定するまでにはいたらないが、埴輪の時期を基本としつつ鉄鍬や須恵器の時期をも勘案して、当墳の築造時期は集成編年の 6 期後半から 7 期初頭、須恵器編年では TK73 型式段階後半から TK216 型式段階初頭と考えておきたい。すなわち、長目塚古墳は古墳時代中期中葉のうちでも早い段階、実年代では 5 世紀前葉に位置付けられる。

古墳の史的意義 長目塚古墳の時期をこのようにとらえると、当墳は古墳時代中期中葉前半の熊本県地域ではもっとも規模の大きい前方後円墳であると認められる (図 57)。これまでにも幾度か指摘したことがあるが [杉井 2010・2012]、古墳時代中期中葉は熊本県地域ではきわめて重要な時期の 1 つである。すなわち、当該時期には、これまで有力な首長墓系譜が存在しなかった内陸部に前方後円墳が築造されるという現象がみられるのである。その典型が、合志川中流域左岸の熊本市植木町高熊古墳 [西嶋編 2004] や緑川中流域 (熊本平野周辺東側) の熊本市城南町琵琶塚古墳 [杉井 2006] であり、阿蘇谷 (白川上流域) の長目塚古墳もこ

れらと同様にとらえられる。

こうした地域は、河川づたいに進む内陸ルートの最重要地点である。とくに合志川中流域や緑川中流域には、帯金式甲冑や窖窯焼成による精美な埴輪、あるいは朝鮮半島系渡来文化などが色濃く分布する。つまり、当時の最新の文物、文化要素が優先的にもたらされているのである。こうしたことから想像されるのは、古墳時代中期中葉の熊本県地域、なかでも有明海沿岸地域では、海岸沿いのルート以上に、河川づたいの内陸ルートが重視された可能性である。そして、甲冑や埴輪などの動向をみれば、こうした動きには、古市・百舌鳥古墳群を造営した中央政権が密接にかかわっていた可能性を指摘できる。つまり、これまでとは異なった地域の在地勢力と新たな関係を取り結びながら、地方との政治・経済関係を発展させようとした中央政権側の意図がかいまみえるのである。

このことを念頭におけば、長目塚古墳は、九州島における情報伝達・文物交流の主要ルートの1つとして阿蘇谷経由の内陸ルートを最重要視するようになった中央政権側からの当地の首長へのつよい働きかけを契機として築造された古墳であると評価できる。これが、のちに阿蘇市迎平古墳群6号墳〔島津編1980〕に同型鏡の画文帯環状乳神獣鏡がもたらされることにつながるのである。

このように阿蘇谷は古墳時代においてもきわめて重要な地域であったと思われるが、長目塚古墳以外の当地の古墳の内容については不明な点が多い。なかでも、古墳時代前期の阿蘇谷の古墳動向はほとんど明らかになっておらず、長目塚古墳の出現に至る過程の解明は今後に残された重要な検討課題である。古墳時代の集落の様相もまったく不明のままである。さらに古墳時代の九州島で阿蘇谷が果たした歴史的役割を明らかにするためには、阿蘇谷のみではなく南郷谷や外輪山周辺部、そして阿蘇の西側では大野川流域、北側では筑後川流域などにおける古墳動向の検討もあわせて行う必要がある。未報告のままとなっている重要資料も数多くあるため、それらを世に出す仕事も含めて、今後も調査・研究を継続していきたいと思う。

(杉井 健)

第2部第4章 引用・参考文献

- 岩崎充宏・山下志保編 1994「中通古墳群」『熊本大学文学部考古学研究室研究報告』第1集、熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1-47
- 乙益重隆 1962「阿蘇谷の古墳群」『熊本県文化財調査報告』第3集、熊本県教育委員会：pp. 41-70
- 坂本経堯 1962「阿蘇長目塚 附小嵐山古墳」『熊本県文化財調査報告』第3集、熊本県教育委員会：pp. 1-40
- 島津義昭編 1980「塩塚古墳」『熊本県文化財調査報告』第46集、熊本県教育委員会：pp. 1-23
- 杉井 健 2006「琵琶塚古墳再考」『文学部論叢』第89号、熊本大学文学部：pp. 1-27
- 杉井 健 2010「肥後地域における首長墓系譜変動の画期と古墳時代」『九州における首長墓系譜の再検討』第13回九州前方後円墳研究会鹿児島大会発表要旨集、九州前方後円墳研究会：pp. 131-184
- 杉井 健 2012「マロ塚古墳出現の背景」『マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器武具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第173集、国立歴史民俗博物館：pp. 541-562
- 高木恭二 2008「石棺から見た古墳時代の九州」『火の君、海を征く！～古墳からみたヤマトと八代～』平成20年度秋季特別展覧会 八代の歴史と文化18、八代市立博物館未来の森ミュージアム：pp. 126-141
- 西嶋剛広編 2004「高熊古墳第1次・第2次調査概要」『考古学研究室報告』第39集、熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1-20
- 林田和人 2002「肥後における中・後期の様相」『古墳時代中・後期の土師器―その編年と地域性―』第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料、九州前方後円墳研究会：pp. 117-144
- 広瀬和雄 1991「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国・四国編、山川出版社：pp. 24-26

第2部第4章 挿図出典

図57：杉井2010を一部改変